

論文要旨

経営学研究科経営学専攻修士課程
マーケティングコース
菊谷 昌由

本研究は、医師の薬剤選択における情報入手源の要因を明らかにするため、質的比較分析（fsQCA）を用いてプライマリー領域（例：高血圧）とスペシャリティ領域（例：パーキンソン病）を対象に分析を行った。データは大学病院および地域基幹病院に所属する脳神経内科医を対象にアンケート調査を実施し、27名の医師から収集した。

パーキンソン病のような専門性の高い疾患では、最新の情報や学術的知見が意思決定において重要であることが示された。一方で、高血圧のような成熟した製品カテゴリーでは、医師の診療経験に基づくシンプルな選択が行われやすく、一部では製薬企業情報への依存も確認された。

これらの結果から、疾患特性に応じた情報提供アプローチの重要性が示唆された。専門性が高い疾患では、学会や製薬企業が提供する最新の提供が有効であり、一般的な疾患では医師間の情報共有を促進する取り組みが効果的である。また、MRの減少は医師のニーズ低下によるものではなく、情報提供の手段や内容の見直しが必要であることが示された。これらの結果は、医師の意思決定プロセスの理解を深めるとともに、製薬企業による戦略的かつ倫理的な情報提供の重要性を示唆する。本研究は、医師の意思決定プロセスに関する理解を深めるとともに、製薬企業による戦略的かつ倫理的な情報提供が医療現場における適正な薬剤選択を支える重要な要素であることを示している。

今後の課題として、調査対象の拡大や多様な医師層からのデータ収集が挙げられた。本研究は、医師の薬剤選択における意思決定プロセスの理解を深め、製薬企業のプロモーション戦略の改善に寄与するものである。